

## 環境 NPO リーダー研修報告書

NPO 法人みどり環境ネットワーク！

清水千尋

### ① 訪問団体の活動やマネジメントなど、どの部分を日本の NPO として生かせるか

ドイツ研修で得た、私の中で一番の成果は、「他人事を自分事におきかえる思考」にチャンネルが合ったことでした。一見すると、とてもシンプルで当たり前のことです。しかしながら、環境問題についても、自身の地域の中での問題、団体の活動についても、問題化してきた時間、関わってきた時間が長ければ長いほど、日常の中に忙殺されたり、ルーチン化してしまったり、どこかで自分事として捉えることを忘れてしまっていたように思います。日本の NPO の多くは中小規模。事務局の負担は個人に重くのしかかります。私自身、毎日の業務に追われ、そこから自分を守ろうと、無意識のうちに、他人事と自分事分けていたように思います。そのような状態では、自身のリーダーとしての資質も、団体の活動も、ひいては日本の NPO 活動も発展、向上していけるはずがありません。

この研修期間は日本での業務と完全に離れ、各研修先を回りながら「自分であれば、自分の団体であれば、日本であればどうするか」常に意識し学んできました。

その中から 5 点、日本の NPO として生かしていきたいことを以下に記します。

#### 1. アクティブで継続的な組織作り

ドイツでは、大規模な環境破壊や汚染などが起きた時にそれに対応して、人々が声を上げるところから始まっています。そして、実際に法改正や権利の獲得等を成し遂げてきたことで「自分たちは社会を変えることができる」と信じ、アクティブに活動を継続している人たちが多くいます。

また、アクティブな状態を継続していくことは、ドイツであっても日本であっても容易ではなく、定期的に見直しをかけ、以下 3 点を実行することが必要だと考えました。

##### 1-1. 団体理念・事業目的の明文化と共有・発信

会員は同じ目的を持った仲間です。団体の役員から個人の会員まで、理念や事業目的の共通理解が必要です。

##### 1-2. 各事業の分類・整理

理念と照らし合わせながら、役員他会員と定期的に活発な議論をし、団体にとって本当に重要な事業、必要な事業であり続けるようにする。

##### 1-3. 楽しみながら活動できる環境の創出

どんなによいことでも、楽しくなければ継続しない。活動に携わる人々が何を欲

していて、どうすると喜ぶのか、常に考えサポートすることが重要。

## 2. 相手のことを考えたファンドレイジング（資金調達）

団体の活動発展に必要な不可欠な資金（人材、資材含む）を今後日本のNPOも積極的に取得していかなければならないと考えています。ドイツで学んだ「ファンドレイジングには投資が必要」という発想をもって、以下4点に意識しながら時間や労力、必要な資金をかけていく必要があります。

### 2-1. リサーチ

寄付して貰えそうな人をリサーチすることが大切。お互いの環境理念が合わないところとはコーポレートできない。さらには、寄付者の詳細を記録に残し、顧客満足度を高められるような情報管理を行う必要がある。（データベースファンドレイジング）

### 2-2. コミュニケーション

よく知らない相手にはお金を寄付したいとは思わない。気持ちよく寄付したいとおもってもらえるようなコミュニケーションが必須。

### 2-3. 感謝の表現

金額の大小に関わらず、感謝の気持ちはすぐ伝える。併せて、金額に応じたスペシャリティを用意し、相手がまた寄付をしたいと思うような状態を保つ必要がある。

### 2-4. 効率化

効率的な方法へ改善していくことが常に必要。無駄なコストを削減することもファンドレイジングである。

## 3. “本物”を伝える

今回の研修で、様々な活動の現場を訪問させていただくことができました。“本物”を見せる、伝えることの力、そこから感じ取るものの大きさに感銘を受け、その大切さを実感しました。その中でも、デュッセルドルフの100k㎡の炭鉱と火力発電所、炭鉱の掘削対象地として消えていく街から受けるインパクトは絶大でした。今までの地球環境問題の学習がいかに机上の空論だったのかということを知られました。そして、炭鉱、火力発電所廃止のために30年間活動されているヤンゼンさん。淡々と、「少しずつだけれど状況はよくなっているよ」とおっしゃる姿に感銘を受けました。また、都市部の自然再生活動『みどりの橋』の訪問では、マインツの新市街地の中にある緑地管理活動を落書きだらけの花壇の中で一生懸命行っている様子に大きなショックを受けました。日本では、私の地域では、他人事であったとしても、一生懸命活動している花壇いっぱい落書きをするよ

うなことは見られないのではないのでしょうか。“本物”の現場を目の当たりすることで、ドイツ＝環境先進国であり、環境に対する意識が「日本人＜ドイツ人」だから、ドイツでは環境活動が上手くいき、日本では上手くいっていないのだという先入観が払拭されました。ドイツという国が犯してきた環境破壊と、それをなんとか改善しようとしてきた凄まじい努力、それをもとに培ってきた仕組みや組織などを最前線の現場の声も踏まえながら学ぶことができました。また併せて、日本の良さも実感することができました。

“本物”を伝えることは、時に容易でなかったり、勇気が必要だったりします。しかしながら、そこに大きな価値があることを忘れずに活動することが大切です。

#### 4. 継続的な広報

人は黙っていても来ません。新しい人材や会員を入れることは、団体の活性化に繋がります。団体によっては、事業を行うことで精一杯で、広報に手が回らないという状態にもなりがちです。しかしながら、広報が不十分であるということは、単純に自分たちの活動を知る人が増えないというだけでなく、現在入会している会員の方々にも、いただいている会費の効果を十分に伝えられていないということになります。会員や、寄付をしてくださる方、イベントスタッフとしてマンパワーを提供して下さる方々は団体にとって“お客様”。顧客満足度という観点から、とても大きな問題です。団体のリーダーはしっかりと自覚して、広報に投資をしていくことが必要です。

#### 5. 次世代に繋がる人材育成

森のようちえんを訪れた際、アルツィーでは、先生が NABU（ドイツ自然保護連盟）のアクティブ会員であったり、ボイムリングでは、卒園生が実習生として来ていたりしており「また戻ってきたい」、「また自然と関わりたい」という気持ちになっていたことがうかがえました。教育というのは、すぐに結果が出るものではありませんが、成果を信じて継続することはとても大切なことなのです。

② 研修を通して、日本の環境 NPO 活動を支援するために、どのような仕組みが考えられるか。

1. 専門性を活かした小さな NPO の集合体を作り、地域行政へ専門家として提言できる仕組みを作り。

現状としては、地域の環境政策に NPO 他市民の声が必ず求められるという仕組みは、ありません。地域の緑地開発や、まちづくりに提言できるような知識、技術、情報をもった連合体を作り、行政に対して意見が言えるような仕組みを作りたいと思いました。

講師の何名かから、小さな団体だからできないではなく、みなでネットワークを作ってアクションを起こすことがあってもよいのでは？という意見をもらい、確かにそう

だ！目からうろこが落ちました。

### ③ 全体を通しての感想

私はこの研修に以下4点の課題をもって臨みました。

まず1つは、団体運営をもっとアクティブにすること。2つ目は、地域の NPO の中でより輝いていけるような事業を見出すこと。3つめは資金力不足、人材不足を解決できるように、自分たちの団体に適したファンドレイジングの方法を学ぶこと。加えて4つ目は、リーダーとして活動していくために必要な要素を見出すことでした。(研修以前は、リーダーには人を魅了する“カリスマ性”が必要だと思っていました。しかしながら、私自身にはそれがないことが長年の悩みでした。)

まず、1つ目の団体運営の課題は、目標の明確化、数値化、事業の見直し等、かなり解決方法がクリアになったので、団体に戻ったらすぐ実行に移していきたいと思います。

次に2つ目の課題についてですが、6月から始めたイベント型森のようちえんを改善していき、都会の子ども達に、都会にもみどりはあることをしっかりと伝えていきたいと考えました。そして、今回の研修で生まれた繋がりを大事にしながら、強固な活動基盤の構築を進めたいと思います。

続いて、3つ目の課題についてですが、まずは、地域をよくリサーチすることから始めるべきであることが分かりました。地域にとって本当に必要なもの、地域の企業が欲しているものはなんなのか・足元をしっかりとリサーチすることから初めてみます。

そして4つ目の課題についても、明確な答えを得ることができました。リーダーとして大切なことは、カリスマ性ではなく、「真摯に仲間や地域と向き合い、皆で活動を継続していくこと」でした。リーダーが成長することは、団体にとってもよい影響を与えます。しかしながら、あくまでそれは団体のみんなやその活動に活かすためでなければいけません。会員、協力者がいてのリーダーであるということを忘れずに、これからも足元の自然を守り伝えていく活動を続けていきたいと思います。

### ● 最後に

オリエンテーリング含めると11日間、最初から最後までストーリー性と、それぞれの学びの意図を感じられる研修で、“育てて頂いている”という実感を持ち続けることができました。きっとそれが、決して楽ではないこのスケジュールを乗り切るモチベーションとなったのだと思います。そのコーディネート力を参考に、私自身も地域に戻り、その子ども達を中心に、多くの環境に携わる人材を育てていきたいと思います。